カリキュラム・マネジメントの一環としての評価とは

3回にわたって紹介した教育リサーチ「カリキュラム・マネジメント」に、多くの反響をいただきました。たくさん寄せられたご質問の中から、今回は「カリキュラム・マネジメントの一環としての評価」について、田村 学先生にお話しいただきます。

田村 学（たむら まなぶ）

國學院大學人間開発学部初等教育学科教授。新潟大学教育学部卒業後、小学校教諭などを経て、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを歴任。2017年度より現職。生活科・総合的な学習の時間の実践、カリキュラム研究に取り組んでいる。

評価の機能とは？

そもそも学習評価は何のためにするのか？ 大きく四つあると考えています。

一つ目は、指導と評価の一体化
二つ目が、自己評価能力の育成
三つ目が、説明責任の遂行
四つ目が、カリキュラムの評価

一つ目の「指導と評価の一体化」とは、具体的な子どもの姿の見取りをもとに、指導の改善に向かわなければいけない、という意味での一体化であり、**評価の結果を具体的な指導の改善に変えていくことが大切だということ**です。

二つ目の「自己評価能力の育成」とは、自分の学びを自分で評価できるような力を持つことが最終的に重要になってくるということです。

その意味では、**評価をしていくこと自体が**、教師のためだけの機能ではなくて、**子どもたちにも反映され、生きて働くこと**が大切だということです。

ただ、この自己評価能力に関しては、発達の問題があり、低学年に多くを期待してもむずかしいのではないかと考えています。一方、高学年や中学生になれば、自分たちで目指す姿を明らかにすることができます。そのこと自体が自分の学びを客観視したり、メタ認知したりして、自らの評価能力を高めることにつながるのではないか、ということです。ルーブリックを教師と子どもで作成し、学習活動を行うといった取り組みが挙げられると思います。

三つ目の「説明責任の遂行」とは、評価の結果を、保護者、あるいは地域の方たちに説明していかなければいけない使命があるということです。

評価結果をより「確かな形」で説明していくことが求められます。「確かさ」とは客観性ではなく、妥当性や信頼性があるかどうかがポイントになってくる、ということだと考えています。

四つ目の「カリキュラムの評価」は、比較的新しい考えかもしれません。**カリキュラムを評価し、カリキュラムを改善していく**ということです。

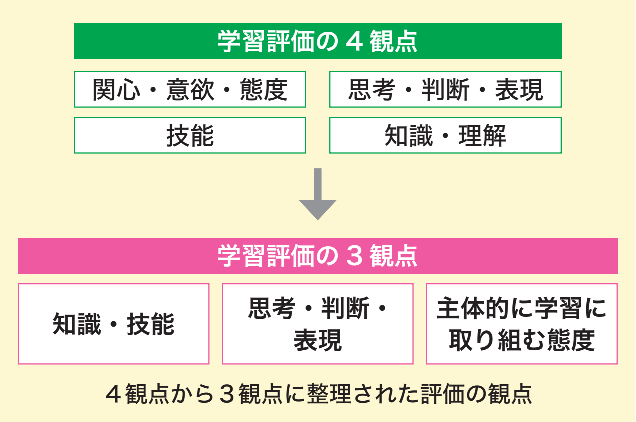
昔はカリキュラムや指導計画をデザインするという意識はあまりなく、教科書をもとにした指導計画を、そのまま行っていた時代もありました。

自らカリキュラムをデザインすることもなければ、当然その見直しということもなかったのです。今回の「カリキュラム・マネジメント」でカリキュラムをデザインすることになれば、自分たちがつくったカリキュラムが適切か

どうかの判断をし、その修正をしなければいけないし、それがPDCAのサイクルになっていくはずです。

そこに、単元配列表、単元計画のデザインと見直しが入ってきて、教育目標からくる一連のものとしてつながる。教育課程全体に関係する評価が機能するためにはどうしていくか、ということになってくるのだと思います。

ここに評価の観点というものを位置付けて、学習の状況を見定めようということになります。この評価の観点については、今回の学習指導要領では、簡単に言うと4観点から3観点に組み直していこうということです。



４観点から３観点に整理された評価の観点

評価の観点は「窓口」

評価の観点は、適切な評価を実現するための、あるいは子どもの資質・能力の育ちを我々が見取っていくための、言ってみれば「窓口」のようなものであると思います。

これまでの4観点が、今回は、いわゆる育成を目指す資質・能力の三つの柱の「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の方向で検討されてきたわけです。

ただ、「学びに向かう力、人間性等」は表現としても大きく、「主体的に学習に取り組む態度」といった観点の方向になっています。

その意味では、今回の学習評価の3観点を前回の4観点との整合性で整理するならば、「知識・理解」と「技能」が「知識・技能」になり、「思考・判断・表現」は変わらず「思考・判断・表現」、「関心・意欲・態度」が「主体的に学習に取り組む態度」に整理されたということになります。

この評価の観点については、これまでは、国語科は5観点、ほとんどの教科は4観点です。国語科だけが特殊なつくりなのですが、多くの教科が4観点です。図画工作科、音楽科も若干形式は違うのですが4観点です。

しかし、生活科はすでに3観点です。いわゆる知識にあたる「気付き」、思考・判断・表現にあたる「思考・表現」、そして、主体的に学習に取り組む態度にあたる「学習意欲」の三つで構成されており、生活科の観点はほぼ新しい方向に合っているということです。

三つの観点に整理されることで、いままでと何が変わってくるかというと、大きく二つあると思っています。

一つ目は、各教科等でバラバラだった観点が、横並びに整理されることによって、教師にとっては評価しやすくなるのではないか、ということです。

二つ目は、入り口と出口が揃ったということです。

評価というのは言ってみれば、学びの結果を見取る出口です。入り口というのは、学びをつくる入り口ですから、学習指導要領になります。

これまでは学習指導要領に示されていたものと、評価の観点で記述していたものが若干違っていたわけです。

学習指導要領を作成するにあたって、学力の三要素とは言っていたものの、各教科等の学習指導要領の記述がそれに準じていたわけではありません。入り口とは異なる出口で評価していたということになります。

今回は、入り口が資質・能力の三つの柱で作成してあり、出口もその三つの観点で見るということですから、入り口と出口が揃っているということになります。ここが大きなポイントです。

入り口と出口が揃い、教科等間が揃うことによって、資質・能力が育成された姿、関連付いて活用・発揮される姿が「見える化」されてくるものと期待しています。

そのことは結果的に単元配列表の充実に結び付くでしょうし、カリキュラムをデザインする際の活用・発揮の場面が、単元内のみならず、教科等全体を俯瞰した状態で生まれやすくなってくるのではないか、と考えています。

資質・能力の育成への取り組みは厚みを増すと同時に、効率化に向かうのではないかと期待しています。

詳しくは書籍で！

A5判 ● 200ページ（2色）● 定価1,800円+税